



第 76 回 (2013. 9 月号)

Galloping Foxley 「韋駄天のフォックスリイ」 Roald Dahl

早川文庫『あなたに似た人』 所載 田口俊樹訳

by 柴田耕太郎

文法力をつけたいが、無味乾燥な文法書など読みたくない。

そんな読者のために、人気小説の翻訳書に見る誤訳・悪訳をとりあげ、文法面から解説してゆく。題材は最近映画化された『チョコレート工場』の原作者で、日本がロケ地になった映画『007 は二度死ぬ』の脚本家でもあるロアルド・ダール(Roald Dahl)の短編から任意に選ぶ。いずれも原文で 10 ページ程の短いものが中心だから、読者も自分で訳してみて、この解説を参考に市販訳との優劣を競ってみてはいかがだろうか。

冒頭に誤りの種別と誤訳度を示したうえ、原文と邦訳、誤訳箇所を掲げます。どう間違っているのか見当をつけてから、解説を読んでもください。パズルを解く気分で、楽しみながら英文法を学びましょう。

誤訳度：*** 致命的誤訳(原文を台無しにする)
 :** 欠陥的誤訳(原文の理解を損なう)
 :* 愛嬌的誤訳(誤差で許される範囲)

【ストーリー】

主人公は初老の紳士。毎日列車でロンドンの事務所に通っている。或る日から、見なれぬ男が通勤に加わり、あろうことか自分の定席の向かいに座を占めた。古い記憶を引き戻してみると、中学時代同じ寮生活をし、自分をたっぷりいじめてくれた上級生だった。あの時の辛い思いをちくちくと思い出として話し、いたぶってやろうと声をかけた。ところが・・・人違いであった。

（原文 p506—訳文 p157） * * 代名詞

Then I sort of froze up and sat staring at him for at least a minute before I got hold of myself and made an answer.

'This is a smoker,' I said, 'so you may do as you please.'

私はゾクッとすると、すくなくとも一分ぐらい、その男の顔を、穴のあくほど、みつめたまま、坐っていたのだ。それからやっと我にかえて、答えたものだ。

「わたしだって煙草のみですよ。どうぞお気がねなく」

【コメント】

this を取り違えている。「私」ではなく「この車両」のこと。

ついでに a minute は「一分」ともとれるが、そんなに見つめる失礼は普通しまい。「しばらく」の意にとるのが順当。at least は「少なくとも」との限定ではなく、a minute を強調している(とにかく、何しろ)ととるのがよいだろう。

(修正訳)⇒これは喫煙車ですからね。

(p507—p158) * * 形容詞

I can't say I've ever had an actual conversation with him before — we are rather a reserved lot on our station — but a crisis like this will usually break the ice.

とって、これまでに会話らしい会話をかわしたことはなかった——この駅では、二人ともひどく内気な人間だったからだ——しかし、このような危機に直面したら、だれだって打ちとけるものだ。

【コメント】

lot は「奴、輩、人」。reserved は「内気」でなく「控え目な」。やたらに馴れ馴れしくしない、イギリスのインテリなのだ。we は「二人」でなく「この郊外の小さな駅で通勤列車に乗る人たち」ととったほうがよいだろう。

(修正訳)⇒だれもが控え目で、やたらに話しかけたりしない。

(p510—p163) * * 名詞

They were pointed shoes, and it was my duty to rub the leather with a bone for fifteen minutes each day to make it shine.

先のとんがった靴で、それがピパピカになるまで、毎日骨でみがくのが、私の役目の一つだった。

[コメント]

ここ、田口俊樹の新訳でも「骨」となっているが、「骨でみがく」とはどんな靴なのかと
思ってしまう。bone 辞書を丁寧に引いてゆくと、= bone white[骨白色、ボーンホワイト(灰
色がかかった白など)]とある。これが a と可算名詞化され「白系の靴墨」とするのが順当だろ
う。

(修正訳)⇒**白い靴墨で**

(p516—p176)? 数詞

“I’m glad to meet you,” he said, lowering the paper to his lap. ‘Mine’s Fortescur —
Jocelyn Fortescue, Eton 1916.’

「いや、お目にかかって、こんなにうれしいことはありません」と、相手は新聞を膝にお
くと言った、「私、フォーテスキューと申します、ジョスリン・フォーテスキュー。イー
トン校、一九一六年の卒業です」

[コメント]

「この前に主人公が自分を紹介し、— and I was at Repton in 1907.と言っている。in は入
学年度を示すととってよいだろう。Eton 1916 と in がないのはどうとるべきか、入学なの
か卒業なのか。こうしたちょっとしたことが哀しいかな、私も含め日本人の英語学習者
にはわからない。機会を見てネイティブに聞いてみよう。